
BE FREE

白井雪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B E F R E E

【Nコード】

N 2 4 4 7 L

【作者名】

白井雪

【あらすじ】

舞台は中世ロンドン、時は国王軍と反乱軍による国内闘争の続く荒れた時代だ。

ある夜、「フクロウ」という盗賊団がロンドン郊外の資産家の令嬢を誘拐するという計画をたてる。

ところが、計画実行の日、フクロウのメンバーの一人であるテルが、令嬢を連れて逃走。かつての仲間である盗賊たちに追われながら旅をすることになる。

盗賊団を裏切ったテルの目的は一体、そして、二人は無事盗賊た

ちから逃げ切ることができるのだろうか――。

第一話 盗賊団の誘拐計画（前書き）

この物語の舞台に正確な年代はありません。

皆さまのもつ「中世ロンドン」のイメージを当てはめ、お楽しみください。

第一話 盗賊団の誘拐計画

「今回は真珠商人の令嬢を誘拐する」

低く、しゃがれた声がした。これ以上ないほど小さくひそめられた声だ。

月の光も差さない暗い部屋の中、テーブルのランプの光だけが揺れている。

弱々しい光に照らし出されるのは、ぼろぼろの木の壁と、怪しげな男たちの姿だった。皆粗末なローブを羽織り、フードをかぶっているために互いに顔は見えない。もちろん、表情を読み取ることもしなかつた。

部屋全体はあまり広くはなかつた。そこに、盗賊らしき数名の男たちがテーブルを囲んで座っている。彼らは皆押し黙って、次の犯罪の計画に耳を傾けていた。

物が置かれていない室内は、整頓されているというよりも廃屋のようだ。古く腐りかけた床板は何もしなくてもギシギシとわめく。

目に映るものすべてが、不潔で、陰気だった。

そこは、ロンドン郊外にある盗賊団「フクロウ」のアジトだった。人がほとんど通らない林の中で、町が寝静まる頃にいつもそつと明かりが灯るのだ。

町の人々は誰もそのことに気付いていない。むしろ、その存在すら知る者はなかつた。

蒸し暑い夏の夜であるにもかかわらず、強い風が吹く。外れそうな窓がガタガタと揺れるのが収まってから、盗賊の頭らしき男、ゲラムが口を開いた。

「令嬢の名はシエラ・ベルローズ。俺たちはそいつをさらって、身代金を要求、最後は売り飛ばす——」

ゲラムの言葉に、男たちの不気味な笑い声が室内に響く。

「テル、詳しい情報を教えろ」

男に言われ、テルと呼ばれた小柄な男がうなずく。

その男もフードを深くかぶっており顔は見えなかったが、うなずいた拍子に子供のような赤い髪がちりりとぞいた。

「シエラの住む屋敷は、この町の東のブリシュにある。屋敷の主人はロズワードという真珠商で、町の奴らに聞きや、かなりのお金持ちらしいぜ。経営のために、結構悪いこともしてるって噂さ——。屋敷は山奥にあるから見張りもいねえし、こんないい力毛はそうそういねえよ」

声や口調からすると、男はまだ若いようだった。

テルは一旦言葉を切ると、にやりと笑い男たちを見回して言った。
「それにロズワードってやつはどうやら、国王軍派らしいぜ」

「……………」

その一言に、室内の空気が一瞬にして張り詰めた。その言葉はどうやら、この盗賊たちの間ではタブーらしい。そんな男たちの反応に、テルはただ薄く笑うだけだった。

その後、テルが調べておいた屋敷の間取りに合わせ誘拐の計画が入念にたてられ、男たちは解散した。密談が終わったのは、夜中の三時を過ぎた頃だった。

夜風に吹かれながら、テルは一人街角にたたずんでいた。月が彼を後ろから照らし出し、長い影ができる。

レンガ造りの民家が町の通りに沿って並んでいる。地面の石畳には沢山のヒビがあった。

静かな田舎町だ。だがその影では、自分たちのような賊がうようよしている。

イギリスは今、国王軍と反乱軍の対立により、いつ国内闘争が起きてもおかしくない荒れた時代の真っ只中だった。

不当な労働に、繰り返される戦争の飛び火、物資の不足、恐怖、怒り、飢え——皆が疲れ果て、生きる気力をなくしていた。

そのため、フクロウのような無法者が出現しては、あちこちで略奪が平然と繰り返されていた。

世間とはにかく、「国王軍派」、「反乱軍派」に別れ、相手を打ち砕くことばかりにとりつかれていた。

フクロウもさしずめ、そんな世の中の小さな反乱軍といったものだった。

自由を求めることが、かえって人々の自由な考えと生き方を奪っていた。

しかし、戦いに没頭する者は決してそのことに気付かない。

「疲れた国だ」

テルは一人そうつぶやいて、曇った夜空を見上げる。そして、懷から白い封筒を取り出した。

手紙の消印は一年以上も前だった。いつも持ち歩いているためか、ぼろぼろだ。

手紙の差出人の名前は、女の子らしいきれいな字でこう書かれていた。

——シエラ＝ベルローズ——

テルはしばらくの間その字をじっと見つめていたが、中身は読まずにしまい込むと、足音を響かせながら歩き出した。

ロズワードの屋敷は、ブリシュの北の山中にある。屋敷の後ろには険しい崖が切り立っており、それがブリシュと隣町とを隔てていた。

木々がうつそうと茂る中、月の光に浮かび上がる石造りの屋敷——それがロズワード邸だった。

屋敷は、西と東にそれぞれ塔を有している。建物自体は古い建築様式だが、その外観は貴族の城に劣らぬほどおごそかだった。

馬車から降りたテルは、山のふもとから屋敷の尖塔を見上げる。

月明かりに青く照らされるそれは、どこか寒々しい印象を受けた。辺りは静まり返っていた。虫の鳴き声一つ聞こえない。

今来た道を振り返るが、むろん町に明かりはない。自分たちのよ

うな怪しい人影もなかった。

人を誘拐するには最高の条件だ。ただ一つ邪魔をするものがあるとすれば、ばかに明るい月明かりだけだった。

アジトでの密談から三日目の夜、フクロウは標的となる少女の屋敷の側に現れた。

くしくも今夜は、満月だった。

テルに続き、ぼろ布がかぶせられた粗末な馬車から五人の男たちが降りてきた。三日前アジトにいた顔もあるが、やはり皆フードをまぶかにかぶっている。

目を引くほど男たちの中で小柄なテルは、馬車に残る仲間と言う。「堂々とこんな通りに馬車を停めるのはさすがに怪しまれる。少し森の中に入って待機してくれ」

テルはフクロウで一番若い人物だ。しかし、この場での司令塔はテルだった。にもかかわらず、誰も不満げな表情一つ見せない。

馬車が今停まっているのは、民家が沿って建ち並ぶ本通りと森が突き当たる場所だ。いくら真夜中だといっても、確かにここは人目につきすぎる。

「さあ、準備はいいな？」

フードの奥で笑いながら、テルは言う。その言葉に、男たちは皆よこしまな笑みを返した。

そして、彼らはランプも持たず月の光だけを頼りに歩き始めた。

計画通り、シエラ・ベルローズを『誘拐』するために――。

ロズワード邸は、間近で見るとより重々しい印象を受ける。

ひび割れた石壁は屋敷の古さを顕著に表していたが、建物全体は豪壮で実に堂々と山の中に構えていた。

もちろん、明かりはついていない。山奥にひっそりとたたずむ屋敷は、まるで古城だ。

テルの予備調査通り、屋敷は黒い鉄柵に囲まれているものの、見

張りは立っていないかった。柵をよじ上れば、簡単に敷地内に侵入できる。

テルはまるで影のように素早く、芝の生えた庭を横切り標的が眠る寝室へ向かう。男たちも、それに続いた。

このような山の中、一体誰が彼らの姿を確認できるだろうか。

テルはそつと、窓の外から令嬢の室内を覗き込む。

中は暗くてよく見えなかったが、部屋の左隅に置かれたベッドに、可憐な少女が眠っている姿が確認できた。

真っ白いシーツと同様、ぬけるように白い肌をした少女だった。

長い金髪は柔らかくカールし、寝台の上に広がっている。安らかに眠る顔はすつきりとしていて、女神のように美しかった。

間違いない。シエラ＝ベルローズだ。

それを確認したテルは、フードの中でニヤリと笑った。もちろん、そんな彼の怪しげな微笑に気付く者など誰もいない。

雲が月を隠し、たちまち辺りが闇に覆われる。少し空気が冷たくなつたようにも感じた。

テルは後ろに控えている仲間たちに目くばせする。男たちは無言でうなずいた。

テルはもう一度、部屋の中に眠る少女の姿を確認する。

計画実行の時がきた。

——コンコン。

誰かが窓を叩いたような音がして、シエラ＝ベルローズは目を覚ました。

視界は真っ暗だった。窓の方を見ても、月の光さえなく何も見えない。あまりの暗闇に、自分が目を開いているのかどうかも疑わしくなる。

シエラお嬢様の寝室は屋敷の一階、庭に面した部屋だった。そのため、窓の外を人が歩くことはできるが、屋敷の周りには鉄柵があ

る。ましてや、こんな真夜中に一体誰が訪ねてくるというのだ。

不思議に思いながらも、シエラはすつと体を起こした。しなやかな金髪と優雅なその動きは、とても十六歳の少女には見えない。

二年前のことだった。シエラの父がこの世を去ったのは。

シエラの父は、国王軍の隊長を務めた立派な剣士であり、ロンドンでも有数の資産家だった。

しかし、その父が死に、物心つく前に母が他界してしまっていたために、残ったのは皮肉にもシエラにはどうしようもない大きな屋敷と莫大な財産、そして、大勢の使用人たちだけだった。

幸い、父にはエドワードという弟がいたので、父の財産や使用人たちの進路は彼が管理、処理してくれた。

そして、彼女自身は父の古い友人であるロズワードに引き取られ、その屋敷で暮らすことになったのだった。

シエラは再び窓の方をかえりみる。しかし、窓の外にはやはり人影は見えない。——空耳だったのだろうか。

月は雲に隠れたままだったが、闇に目が慣れ部屋の中を見渡すことはできるようになった。

といつても、寝室にはベッドと立派なドレッサー以外何もない。

シエラが普段勉強をしたり編み物をしたりする部屋はここではなく二階だった。

シエラは、ふかふかの絨毯の上にほつそりとした繊細な足を下ろした。

誰かを呼んだ方がいいと思いつながらも、シエラは立ち上がる。そして、何かに引き寄せられるように窓の側に歩み寄った。

窓枠に手を置き、黒いガラスに向かって尋ねる。

「誰かいるの？」

——返事はない。

シエラは少し胸騒ぎを覚えながら、窓を開けた。

——その瞬間、暗闇から誰かの手が伸びてきた。それは蛇のように素早く、少女の口を塞ぐ。

驚いたのもつかの間、シエラは叫び声も出せないまま数名の男たちには部屋の外へと引きずり出された。

地面に落ちた衝撃が体に走る。シエラは口を塞がれたまま、頭の上で窓が閉められる音を聞いた。

「はっはっはっは！ 大成功だ！」

突然聞こえた声に、シエラはびっくりして上を見上げる。するとそこには、フードをかぶったいかにも盗賊らしき男たちが、自分を見下ろしていた。

シエラは縮み上がった。彼らの表情がわからないことが、恐怖を増させる。

怯える少女を見て、盗賊たちは一層あざけり笑う。逃げ出そうとしたが、恐ろしさですっかり体がすくんでしまった。

「さあ、とつと馬車へ戻ろう」

「まあそう震えるなお嬢ちゃん。人質には手出ししねえよ」

その言葉に、男たちはどっと笑いながら屋敷の門の方へと歩き出す。

人質……？

一体これから自分はどうなるのだろう。

シエラは泣き出しそうになった。しかし、恐怖のあまり涙も出ない。

その時、奇妙なことに目の前にいた小柄な男が、彼女をはなしてささやいた。

「ここにいろ」

「え……」

その声を聞いて、シエラの震えはピタリと止んだ。一方で、心臓の音がどんどん高鳴っていく。

男の声には聞き覚えがあった。そう、『二年前』まで、その声を毎日聞いていたような気がする。

シエラがそれを確かめようとした時、男は立ち上がり、彼女に背を向けた。

それに気付いた背の高い男が、振り返りながらいぶかしげに言う。
「どうした、何やってる」

シエラの視線を背中に受けながら、テルは仲間たちと向かい合い腰の剣を抜いた。

月の光に、鉄の刃が青白く光る。柄は落ち着いた金色で、上等な剣だということは誰の目にも一目でわかった。

そんなテルに、盗賊たちは慌てて素振りを見せる。

「小僧、何のつもりだ！」

その言葉に、テルはフードの中でニツと唇を吊り上げる。

「これはどーも、今まで世話になったね。今夜限りでおれあフクロウを抜けさせてもらうよ」

おどけたようにテルが言う。その口調は、ずっと前からそうすることを決めていたようだった。

何よりも、鋭く光る剣の刃がそれを証明している。

「な……貴様ふざけるな！」

たじろぎながら、男たちも剣を抜き放つ。それを見て、テルは笑みをたたえたまま剣を構えた。

彼の構えは、洗練されていて隙がなかった。そんな後ろ姿に、シエラはエメラルド色の目を見開く。

その背中には、確かに見覚えがあった。間違えるはずもない。

次の瞬間、テルが動いた。

凡人ならばその素早い太刀筋を見極めることはできないだろう。

しかし、シエラははつきりと剣が放つその輝きを見切ることができた。何故ならば、何度もそれをすぐ側で見たことがあったからだ。

テルは一瞬のうちに、昔の仲間たちを斬り倒した。盗賊たちは叫び声も上げられず地にひれ伏す。

そんな男たちには目もくれず、テルは剣に付いた血を払い、座り込んでいるシエラを振り向く。

「……………」

たった今日にしたものに、シエラは言葉を失っていた。

信じられない……『彼』がここにいるはずがない。しかし、心は間違いないと叫んでいた。

シエラはためらいながらも、かつて自分が暮らしていた生家で働いていた少年の名を口にした。

「あなた……テルでしょ——。テルなんでしょ？」

テルは何も答えずに彼女の腕を掴んで立たせる。

「山を降りるぞ。後ろは崖だ。追い詰められれば逃げ場はない」

「ちよつとテル！」

テルはシエラの言葉を無視して走り出した。

シエラは感情が高ぶって涙が溢れそうだったが、今は何も言わず彼についていこうと思った。

いつもそうだった。彼について行けば、間違うことはなかった。きつと、今だつてそうだ。

二人で逃げ切れることができたならそのあとで、納得がいくまで問いただしてやる——。

シエラはそう、密かに心に決めた。

あらかじめフクロウの馬車を脇に配置していたおかげで、裏切りに気付かれずに山を降りることができた。

入り組んだ住宅街をできるだけ静かに走り、二人は小さな教会に忍び込んだ。

いつの間にか顔を出していた月が、原色で彩られたステンドグラスを照らす。冷たく青い光が、誰も座っていない長椅子に降り注いでいた。

床には薄っぺらい褐色の絨毯が敷かれ、古びたパイプオルガンとひび割れた石膏の女神が置かれている。

壁の棚には火の消えたるうそくが並び、壇上の壁には赤い十字架が掲げられていた。

テルは壇上に上がり、それをじっと見つめる。

フクロウは、テルとシエラが逃げたことにまだ気付いていないようだ。ともあれ、それから既に一時間が経過している。裏切ったとばれるのも時間の問題だ。

止まることなく走り続けたシエラは、もうヘトヘトだった。何も履いていない足は黒く汚れ、傷だらけだった。血がにじみ、爪も割れている。

その足で、シエラは汚れたローブを羽織ったテルの元へ歩み寄る。

「テル……」

ためらいがちに自分の名を呼ぶシエラに、テルはニツと笑い、フールドをとって彼女に素顔を見せた。

現れたのは、少年の顔だった。大人に見せかけていたが、彼はまだ子供だったのだ。

赤い髪を下手くそな三つ編みにした少年は、シエラに向かって細い目を一層針のようにして笑う。年齢はシエラと同じくらいだろう。決して美少年という訳ではなかったが、その顔は猫のように人なつっこい印象を受ける。

そんな彼の顔を見て、シエラは始めこわばった表情をしていたが、やがて安心したように微笑んだ。そして、もう一度はつきりと彼の名を呼んだ。

「テル」

二年ぶりの再会に感動し、シエラは始めに何を言えば良いのかわからなかった。

言いたい言葉も、訊きたい言葉も、用意しておいた言葉もあったのに――。

そんなシエラに、テルはまるでナイトのように気取った様子で手を左胸に当てると、汚れた床に片膝をついて彼女を見上げた。

「お迎えに上がりました、シエラお嬢様」

第二話 姫とナイト

「シエラお嬢様なんて……そんな呼び方しないで。気持ち悪いわ」
シエラお嬢様の言葉に、テルはケラケラと笑って立ち上がった。
そして、白いワンピース一枚の少女に自分の薄汚れたローブをかぶせる。

テルは少年ながらいかにも盗賊らしい風貌をしていた。

ローブの下にはぶかぶかで色あせた麻のブラウスをまとい、腰には剣を携えている。

いつも面白そうな表情を浮かべ、目はうさんくさくつり上がっていた。しかし、そのグレーの虹彩は決して子供のものではない。

まるで、全身の毛が真っ白になるような、そんな苦労を一身に味わってきた、そんな者の目だった。

シエラの言葉に、テルはいつもの口調に戻って言う。

「久しぶりだなシエラ。おれはずっとお前のことを心配してたんだからな」

「……………」

二年前と同じ呼び方に、シエラは黙り込んだ。

『シエーラ』というのは、テルがつけた愛称だ。シエラというのが発音しにくいと言って、いつの間にかそう呼ぶようになった。

シエラの屋敷にいた時から、テルはひょうひょうとした子供だった。太平楽で、いつも楽しそうに生きていた。きっと、その自由な生き方は今も変わらないのだろう。

昔のことを思い出して、シエラは思わず微笑む。しかし、すぐに顔をしかめて言った。

「どうしてこんなことしてるの？ さっきのあなた、まるで盗賊みたいだったわ」

シエラの言葉に、何を考えているのかテルは自慢げに胸を張って答える。

「その通り！ おれあフクロウつー盗賊団の一員なのさ。……ま、今さっき抜けちまったけどな」

まったく悪びれる様子もなく肩をすくめるテルに、シエラは呆れてため息をつく。

「どうしてそんなこと……」

「お前を助けるためさ」

テルはきつぱりとそう言った。

げんそうな顔をするシエラに、テルは彼女の腕をローブの中から引っ張り出した。

白くて細長い彼女の腕には、殴られたようなアザがいくつもあった。新しいものも古いものもある。それらは痛々しく腕全体に広がっていた。

「……………」

視線をそらすシエラに、テルはじつと彼女の腕を見ながら無表情に言った。

「ひどい目に遭ったんだろ」

「……………」

目を合わせようとしないシエラに、テルはため息をついて手を離れた。

「………… お前の父親には感謝してる」

「どうしたのよ、急に…………」

突然テルが口にした言葉に、シエラは彼の方を見て言う。しかし、彼はそれきり黙り込んでしまった。

普段は迷惑なほどじょうぜつで放っておけば一日中でも話し続けられるテルだったが、彼は昔のことだけは決して自分から話したことがなかった。

口を閉ざしている今、彼は幼い頃のことを思い出しているのだろう。悲惨で、自分の無力さを嘆くことしかできなかった惨めな時代を――。

テルには、両親の記憶がなかった。母は自分を生み落とすと同時

に息絶え、反乱軍の剣士であつた父は国王軍との戦争で命を落としたりらしい。

幼い子供だつたテルは、住む家もなく毎日町をさまよいながら生きていた。

かつてのテルは、生きるために貪欲で、いくらでも狡猾になれるしたたかさをもっていた。他人を騙し、利用することで命を繋いでいたのだ。

つり上がった目と歪んだようなひょうきんさは、その頃の名残だろつ。

「ベルローズさんに出逢つた四年前の日のことは、一生忘れない」
シエラもうなずいて言う。

「雪の降る日だつたよね。父に抱えられたあなたを初めて見た時は…… 本当に驚いたわ」

その言葉に、テルは苦笑する。

「…… おれはあのととき気絶してた」

テルは静かに、壇場の壁の十字架を見上げた。——もちろん、彼には信じる神などいないが。

四年前の冬だつた。

真っ白な雪の中、自分の足跡が見渡せない所までずっと続いていた光景が、今でもしっかりと脳裏に焼きついている。

その日、とうとうテルは寒さと空腹に疲れ果て地面に倒れ込んだ。もはや生きようとともかく気力もなく、地に伏しながら虚ろに宙を見つめていた時——彼の前に、馬に乗った一人の剣士が現れた。

その剣士こそが、シエラの父エルク＝ベルローズだつた。

エルクは衰弱し切つたテルを自宅に連れて帰つた。そして、行くあてのない彼を自宅で面倒を見ることにしたのだ。彼を、シエラの護衛の剣士に育てるために——。

国王軍の隊長であるエルクは、しばしば反乱軍の暗殺者に命を奪われることがあつた。それは、エルクの娘であるシエラも同様だつた。

自分が国王軍の隊長である限り、シエラは命を狙われ続ける——
そう思っていたエルクは、道ばたで拾ったテルに剣術を叩き込もう
としたのだ。テルが大人になった時、彼にシエラを守らせるために
――。

テルは少しだけ剣を鞘から抜いてみせた。銀色に輝く見事な刀身
は、大切に手入れされていることがうかがえる。

金色の柄には勇猛な獅子の装飾が施されていた。――イギリス国
王軍の紋章だ。

「この剣をくれたのもベルローズさんだ」

そんなテルに、シエラはくすくすと笑う。

「うちに来たばかりのあなた、すごく荒れてて大変だったわ。攻撃
的で、みんな手を焼いていたけど……剣の稽古だけはいつも真剣だ
ったわね」

テルはいつもの調子で言った。

「当然だろ。そうしなきゃ家を追い出されるんだから」

「稽古をさぼったとしても、お父様はあなたを追い出したりはしな
かったわよ」

テルはにやりと笑う。

「どうだか」

確かに、剣術を学ぶことはエルクとの約束だった。だがそれ以上
に、生きるために強くなりたかったから、懸命に剣を振るっていた
というのが実情だった。

事実そのわずか二年間の修行で、テルは驚くべき腕を身につけて
いた。もし彼が国王軍や反乱軍の剣士として戦えば、名声を得られ
ることは間違いないだろう。

本人はそれがわかつているのかいないのか、あまり剣を抜こうと
はしないが。

「今思い出すだけでも……ああ、涙がちよぎれる。地獄のよう
な修行だった」

テルは遠い目をして言った。その目には涙が浮かんでいる。

シエラはそんな痛ましい表情を見て笑う。

「稽古のしすぎで、あなた手が血豆だらけだったわよね。フォークもうまく使えなかったくせに、それでも剣だけは握り続けてた」

テルは手のひらを見る。もちろん、そこにもう血豆はない。――
傷だらけで汚れた手であることに違いはないが。

「フォークは今もうまく使えないさ。育ちがよろしくないからな。

――それに、上着のボタンもよくかけ間違える」

「またそんなこと……」

テルの言葉に、シエラは呆れたように言った。

「たった二年……だったけどな」

「……………」

剣を元に戻してつぶやくテルに、シエラは暗い顔になった。

今から二年前だ。エレクⅡベルローズが病死したのは。

その時――テルは初めてシエラの前で涙を見せた。反抗ばかりで、誰も信じることのなかった彼が他人に心を開くようになったのは、皮肉なことにそれからだった。

親との思い出のないテルにとって、エレク存在は大きかった。

彼はテルに、本当の息子のように接してくれた。どんなにテルが反抗的でも、決して放り出そうとはしなかった。

短い間だったが、彼のおかげでテルは親の『思い出』ができたのだ。

そのことに気付いたのも、彼を失ったあとだったが。

一生をかけても、エレクに恩を返すことはできないだろう。だから、テルは誓ったのだ。必ず、恩人との約束を――その忘れ形見を守ると。

しかし、現実 is 当然のように二人を引き離した。

その時十四歳だったシエラは、血族ではなく父の古い友人である真珠商に引き取られることになった。

――それが、ベリクレズⅡローズワードだった。

シエラにはエドワードという叔父がいるが、エレクは子供のいな

い旧友夫妻に遺言していたのだ。自分にもしものことがあれば、娘を頼むと――。

一方、主人を失ったテルはロズワードの保護を受けることを拒み、再び浮浪児のように生きることを選んだ。

ところが、当時は正義感の強かったロズワードは、せめてはと彼を孤児院へ送ったのだ。

それが、彼が何よりも愛する「自由」を奪う行為であるとも思わずに――。

「おれはこれでも孤児院で暮らすことに満足してたんだ。あのおっさんなら、安心してお前を任せられるってな」

テルはそう言いながら、落ち着きなく辺りを歩き回った。その様子を、シエラは流し目で見る。

「なのにとんだ。あいつは自分の事業がうまくいかなかったからって、関係のないお前に殴る蹴るの暴行を加えるようになりやがった」

「ちよつと待つてテル」

「おれはお前を守ると、ベルローズさんに約束した。だから一年前から、こうして誘拐されたように見せかけるために、フクロウに入って機会をうかがってたんだ。お前を助けるために」

「待つてテル。聞いて」

シエラの言葉を聞かず、テルは話し続ける。

「大変だつたんだぞ。組織の信用を掴んで、一年間も味方のフリをしてきたんだ。それもすべては、お前を『誘拐』する計画をたてるためにな」

「だからテル！ あなたどうして私が暴力を振るわれていることに気付いたの？」

「……………」

シエラの問いにテルはヘラリと笑って答える。

「そりやお前あれだ。おれはお前のことなら、どこにいたって何でもわかる。……言つなれば『愛』だな」

「ふざけないで！」

「いや、かなり本気なんだけど……」

強い口調で主人の娘にたしなめられながらも、テルはぼそりとつぶやく。

「——これさ」

「それは……」

テルは懷から、数枚の手紙を取り出した。

それらの差出人はすべて、目の前にいるシエラだった。

「金持ちのお嬢さんがつくようなウソに、おれが引つかかるとでも思ったかい？」

「……………」

テルの言葉に、シエラは言葉を失った。

離ればなれになつてからも、シエラは何度か孤児院にいるテルに手紙を送っていた。

その内容はどれも『元気でやっているから心配しないでほしい』というものだった。しかし、敏感なテルはすぐにそれが偽りであることに気がついた。

シエラは、うつむいて言う。

「——嘘をついたことは謝るわ……。ただどうしてそれに気付いたの？」

「簡単なことさ」

テルはそう言って、シエラの手紙をヒラヒラさせる。

「手紙に書かれていた字が震えてた。それにところどころ滲んでいたしな」

「……………」

「それでおれは何かあつたんだと気付き、孤児院を抜け出してローズワードのことを徹底的に調べあげた。——お前がどんな目に遭っているかなんて、すぐに想像できたさ」

「……………」

テルは黙り込んでいるシエラに手紙を返す。そして、真剣な目を
して言った。

「どうしてすぐにおれに言わなかったんだ」

「……ごめんなさい」

顔を上げることのできないシエラに、テルはため息をつく。そし
て、彼女の頭を優しく叩いた。

「おれの命が今あるのは、ベルローズさんのおかげだ。だからおれ
はこれから、一生をかけてお前を守る」

テルは、顔を上げたシエラの目の高さでにっこりと笑った。

「もうどこにも行かせない」

「テル……」

シエラは思わずテルに抱きついた。そんなことは初めての経験な
のか、テルは面食らったような顔をして目をぐるぐるさせる。

「だけどどうして、わざわざ犯罪組織に入って私を誘拐するように
見せかけたの？ あなたなら、もっと簡単に私を連れ出せたでしょ」

シエラはテルをはなして、不思議そうに尋ねる。

「そこがお前らとおれたちで損ないの違いなんだよなあ」

言葉とは裏腹に、テルはそのことに誇りをもっているように胸を
張った。

「ただ逃げ出すんじゃ、自由とは言えねえ。——おれは強く、自由
に生きる」

「自由に……」

シエラは一瞬胸を打たれたように感じたが、すぐにはっと気付い
て言った。

「だけど、ベリクレズさんはごまかせても、これじゃフクロウから
逃げなきゃいけないじゃない」

「それは手を打ってあるから大丈夫さ」

テルは自信ありげに言った。

「それよりも、これからどうするかだ。——お前、確か叔父がいた
だろ」

「レーラのエドワードさんのこと？」

「レーラか……」

レーラは、ブリシュの東に面した町だ。ここからなら距離はほとんどないが、そこへ行くにはリファドという山を一つ越えなければならなかった。

山中には、隠密行動ができないよう国王軍と反乱軍の両方が張り込み、けんせいし合っている。その上、反乱軍は若い男を見つけると、拉致して戦士にすることもあるという。

何にせよ、シエラを連れて越えるのは危険だった。

だが、エドワードはエレクの死後路頭に迷った使用人たちを、自宅に招いた人物だ。彼ならシエラを任せられる。

テルは、一人うなずいて言った。

「よし、決めたぞ。レーラへ行こう」

テルの言葉に、シエラは不安そうに彼の顔を見る。

「だけど……」

「ここにすることはできないだろ。お前はおれとは違う。大人に面倒を見てもらわなきゃ」

「……………」

奔放で太平楽な性格のくせに、テルはすぐに事の本質を見抜いてしまう。シエラは彼のそんなところに、密かに一目置いていた。

シエラは、何を言ってもテルには逆らえないことと、彼の言う通りにして失敗したためしはないことを思い出した。

「わかったわ……」

シエラはにつこりと微笑む。その笑顔は、石膏の女神に色を与えるよりも美しかった。

「ついていきます。あなたに」

「そうこなきゃな」

テルはきりつとした顔で笑う。そして、唇に人差し指をぽんぽんと当てながら言った。

「いいか、外に出たらできるだけ静かに行動するんだ」

「わかってるわ」

テルはゆつくりと扉を開け、外を覗く。――そして、大きく扉を開け放した。

扉の前には、一人の青年が立っていた。シエラの視線は、その若い男に釘付けになる。

青年は、夏なのに黒いコートをまとっていた。腰には剣を差している。

そして、驚くべきことにその赤い髪とグレーの目はテルとური二つだった。

背はテルよりも少し高く、眼光も彼より鋭い。そして、テルよりも男らしく、美男子だった。

彼はただ立っているだけだったが、その姿勢は油断がなく、まさに若い剣士らしい。

――彼がテルの実の兄弟であることは、誰の目でも一目でわかった。

「カイル……」

テルは兄の名を呼んで、嬉しそうに笑った。

兄とは四年前まで、孤児としてお互い支え合いながらレーラで暮らしていた。

いくらテルが世知賢かったとしても、子供が一人路上で生きていくのには限界がある。それでも彼がベルローズに引き取られるまで生きてこれた陰には、カイルの存在があった。

テルのたった一人の家族であるカイルは、テルの三つ年上の兄だった。

両親の記憶のない自分を、兄は十二年間ずっと守ってくれていた。困窮に満ちた幼少時代だったが、それでもテルが自由な心を失わずに生きてこれたのは、兄がいたからだった。

兄は強く、自由で、二人でいればどんな状況でも笑っていられた。食べ物を盗むことも、大人の盗賊のふりをして金持ちをだまぐらすことも、兄と一緒に楽しかった。何でも冒険になった。

兄は誰よりも頼れる存在で、この世界で唯一信用できる人間だった。それは今でも変わらない――。

四年前突然姿を消した兄が、フクロウのようなちやちな犯罪組織にいることを知った時は驚いた。が、兄にも色々あったらしい。理由は説明してくれないが、とにかく『生きるため』の行動だろう。今は組織で二人仲良く盗賊をやっていた。――もっとも、たった今それを抜けてきたばかりだったが。

テルは兄に向かって得意気に言う。

「予定通りお嬢様を誘拐してきたぜ。美人だろ？ さ、ずらかつちまおうぜ」

テルはそう言うと、シエラの細い手を掴んで歩き出そうとする。

一方、シエラは額に汗をかきながらカイルの顔を見つめていた。

その次の瞬間、カイルが剣を抜いた。

少しの無駄もない、完璧な抜剣だった。

その剣先はまっすぐ、テルとシエラの方を向いている。

「おいおい、何のつもりだよカイル」

テルはふざけて両手を挙げる――しかし、カイルは決して冗談を言っているようには見えなかった。

そして、彼は更に驚くべき言葉を弟に向かって投げかけた。

「シエラ」ベルローズを置いていけ」

第三話 自由を誓え

「何言っただよカイル。さっさと逃げねえとフクロウのやつらが来ちまうぞ」

テルは眉間にしわを寄せながら言う。しかし、カイルはその言葉にも微動だにしなかった。

カイルは、自分が失踪してからの三年間、テルがどのように生きてきたのかすべての事情を知っている。もちろん、彼がベルローズの保護を受けていたことも。

シエラと自分との関係を知って、彼女をさらう計画に協力してくれる約束もしていた。

それなのに――。

ここにきて兄が奇妙な態度をとったことに、テルは焦り始めた。

「ほら、さっさと逃げるぞ」

弟の言葉に、カイルは眉一つ動かさずに言う。

「お前は逃がしてやる。だが、シエラ＝ベルローズは置いていけ」

「……………」

テルは険しい表情で兄を睨む。そして、剣を抜いた。

「どうやら本気みたいだな」

「俺を倒して逃げるつもりか」

テルは剣を兄に向かって構え、にやりと笑った。

「ああ」

「テル……………」

「心配するな」

テルは微笑むと、顔色の悪いシエラの頭をなでた。

次の瞬間、テルはシエラのローブをカイルに向かって投げつけた。視界を奪われたカイルは、軽い動きで白い布を切り裂く。

刃が襲ってくると予想されたが、卑怯な弟はカイルが自分を斬れないことを知っている上で、兄に思い切り体当たりをくらわせた。

「走れ！」

カイルがよろめいている隙に、テルはシエラの手を掴んで走る。剣は既にしまっていた。

月も二人を守ろうとするかのように、姿を隠す。間もなく、辺りは暗闇に包まれた。

テルは後ろを振り向きもせず走り続ける。彼は逃げることにかけても天才的だった。

お嬢様を守ろうと逃げる弟を、カイルは追おうとはせずただ見つめていた。

まるで、そうすることで彼もまた弟を守ろうとするかのように――
。

「あいつと本気で戦えば、おれの未来は百パーセント肉のカタマリだ。だからあの場合は、逃げるしかなかったんだ」

リファドのふもとで、二人は休んでいた。

カイルはまだ追ってこない。だが、決して逃げ切れた訳ではないことをテルはわかっていた。

月は依然雲の向こうだ。まるで、朝と夜が混ざったように、その部分だけが薄明るい黄色の光が滲んでいる。

蒸し暑い森の中で、虫の鳴き声が不気味に響いていた。誰かが聞き耳をたてているようにも感じる。

山の中は木々がうつそうと茂っているが、人が行き来している形跡があった。恐らく、国王軍や反乱軍の哨兵だろう。いつ襲ってくるかわからない。できればすぐにでもここを越えたいが、月もないこの状況で下手に動くのは危険だ。

テルは倒れた大木の上に腰を下ろす。その幹は太く、緑の苔が生えていた。

疲れたようにため息をつくテルに、シエラは言う。

「結局追われることになってしまったわね」

「……仕方ねえよ。計画では、カイルがうまくフクロウをごまかして、三人で逃げるつもりだったんだから」

テルはそう言って再びため息をついた。

普段はあっけらかんとしているテルが、悩み事をしているような顔を見せるのは珍しかった。

シエラは困ったように、テルの隣に座って言う。

「お兄さんのこと……気にしてるのね」

シエラの言葉に、テルは疲れた顔で笑った。

「ベルローズさんの屋敷にいた時——お前にも何度も話したよな」

「ええ、毎日聞いてたわ。カイルの話」

シエラはくすつと笑った。

テルは手の指を組ながら口を開く。

「……カイルが国王軍と反乱軍の戦争に参加して、戻ってこなかった時は——本当にショックだった」

「……………」

数年前——気がついた時には、兄は反乱軍の剣士となっていた。

まだ骨格も出来上がっていない子供だったが、剣の腕は大人と同等もしくはそれ以上だった。

何かに所属したり、誰かの考え出した思想を賛同したりということとを嫌うカイルが、反乱軍の一員になったというのは意外だったし、正直ピンとこなかった。

ただ、例えば昔からカイルは反乱軍的な考えをもっていたような気がする。それが年を追うごとに大きくなり、大人になって兵士になったただけだ。反乱軍の幹部とも子供の頃から、自分が知らないところで付き合っていた。

何にしろ、自分の信念に従った結果がそれならば口出しすることではなかった。テルは兄の行動に全面的に肯定だったし、絶対の信頼を置いていた。

四年前、兄は初めて剣士として戦争に参加した。

結果は、反乱軍の全面的な敗北。指揮官が戦死した大きな戦いだ

った。

そうして、カイルはそれきり帰ってこなかった。

「カイルは死んだ……ずっとそう思ってた」

兄を失い、テルはすぐに路頭に倒れた。一人になった時初めて、テルは自分の無力さと、兄が今までどれだけ自分を守ってくれていたのかを痛感した。

ベルローズに引き取られたあとも、兄と過ごした日々を忘れることはなかった。

思えば——何よりも自由で、楽しい時間だった。彼にとっては本当の意味で、子供でいられた短い期間だった。

テルは顔を上げて、空を見た。その目はいつものように輝いている。

「だからカイルが生きてるのを知った時は——泣くほど嬉しかった」
ふうつと息を吐き、テルは笑う。

「わからないんだ……何でカイルがあんなことをしたのか」
「テル……」

テルが無理して笑っているのは、シエラにもわかった。

「わからないことを考えてても時間の無駄だ。——たとえ相手がカイルでも、国王陛下でも、おれはお前をエドワードのところへ届ける」

テルはシエラに背を向けて寝転び、わざと明るい声で言った。

「さあ、今日はもう休もう。明日の朝出発だ」

「……………」

シエラはじっと、寂しそうなテルの背中を見つめる。しかし、ずっと何かを考え込むような顔をしたまま、言葉をかけようとはしなかった。

「いってえ！ ちょっとはてかげんしろよお！」

赤い髪の色をした少年が、座り込みながら殴られた頭を抱えて叫

んでいる。

年は十歳前後だろう。顔はどこか傷だらけで、活発そうな灰色の目をしていた。

そんな弟を見て、カイルは肩に木の棒をのせながら大口を開けて笑う。

廃屋が並ぶ町の外れ、がれきの真ん中で幼い兄弟が剣の稽古をしていた。

空は快晴。西にそびえるリファドは、木が一本一本確認できるほどだった。

いつものように負けた弟が、膨れっ面をして言う。

「なんだよー！ 反乱軍のリーダーに剣を教えてもらってるからって！」

弟の言葉に笑いながら、カイルは木の棒を置いて本物の剣を差した。

その様子をじっと見ていたテルが言う。

「おれもいつか反乱軍に入って、立派な剣士になるんだ」

「テル……」

カイルが険しい顔をして、弟の名をつぶやいた。

「剣士になるのはかまわない。だけどお前は軍隊に入るより、自由に生きた方がいい」

兄の言葉に、テルはくっつかかる。

「なんでだよ！ おれの生き方はおれが決める！ あにきだからっておれのことを勝手に決めるなよ！」

カイルはそう言う弟の頭をぼんと叩いた。

「ほら、そういうお前の性格じゃ、軍には向かないんだよ」

兄の優しい笑顔に、テルは怒りを忘れてカイルを見上げる。

青空を背景に立つカイルは、妙に大人びて見えて、どこか遠い存在のように思えた。

爽やかな薫風が吹き、兄弟の赤い髪をなびかせる。向かい合う二人はまるで、年の離れた双子のようだ。

「お前は何にも所属しないで、自由に生きるんだ。一人でも生きれるくらい強くなれ」

「つよく……？」

「そうだ」

あどけない表情で聞き返す弟に、カイルはしっかりとうなずいた。「それまでは、兄ちゃんが守ってやる」

そう言うときカイルは、弟に向かって手を差し出した。

「さあ、町に戻ろう。今日はマーシャさんが牛を出荷しに行く日だ。鶏でも一羽盗みにいこう」

目覚めは最悪だった。古い夢を見たと思ったら、霧の中で剣を手にした男たちに囲まれていた。

一瞬、まだ夢をみているのかと思ったが、違った。辺りは確かに幻想的な霧の世界だが、山の中で、朝を迎えただけだ。テルは肌寒い空気にくしゃみをした。

次にテルは、フクロウが追ってきたのかと思ったが、それも違った。自分を取り囲んでいる男たちの顔に見覚えはない。

霧がたちこめているせいで、遠くは見渡せない。そのため、星や月の位置で時間を確かめることもできなかった。

妖精に化かされているのかと思いかけて、やめた。現実を見よう。男たちは二十代後半くらいの若い集団だった。軍服を着ず粗末な服装をしていることから、恐らく反乱軍の兵士だろう。持っている剣もまちまちだ。うまく取り囲まれているため、隙を突いて逃げることもできない。

剣は奪われていなかった。しかし、柄に触れた瞬間、男たちが一斉に剣先をテルに向けた。

「おいおいなんだよ物騒だなあ。一緒にいたかわいなお嬢さんはどこにやったんだ」

テルは両手を挙げながら言う。すると、その後ろから声がした。

「テル！」

振り向くとそこには、男たちに捕まったシエラの姿があった。

「お嬢さん……」

「動くな！」

両手を挙げたまま立ち上がるテルに、男が怒鳴った。そんな男たちに、テルは呆れたように言った。

「女は関係ないだろ。はなしてやれよ」

「その通り……我々が用があるのはお前だ！」

森の中で、男の声が響き渡った。不安そうな顔のシエラを横目で見たあと、テルは鋭い表情になって言う。

「何が望みだ！ 見ての通りおれは文無しだぞ！」

「別に金をとるつもりはない」

「あつ、そう」

テルは一人にやりとした。

ならば噂通り、自分を兵士として拉致するつもりだろう。

このようなやり方しかできないくせに、正義だの革命だのともっともらしい言葉を掲げているこの男たちに気分が悪くなった。

しよせんは自分の勝手な理想を、民間人に押しつけているだけではないか。

「貴様、反乱軍派か、国王軍派か！ 正直に言わんと命はないぞ！」

男の言葉に、テルは不適に笑いながら言う。

「さあ、どっちだろう。今のことがなければあんたたち派だったかも。けどおれあ国王陛下も気に入らねえしなあ」

「きさま！ ふざけるな！」

「おっと、すまないすまない。じゃあ真面目に答えるよ。——どっちでもない」

「どちらでもないだと！？」

テルの言葉に驚いたのか、男たちの剣先がぶれる。テルは相変わらず、ニヤニヤと笑っていた。

「話にならん……娘を貸せ！」

「ダンザさん……」

男たちのうち最も年長と見える兵士が、シエラを捕まえている者たちに言う。その言葉に、テルの顔から嘲笑が消えた。

「遊びの時間は終わりだぞ。小僧……」

ダンザがシエラの首に剣を擬した。シエラは顔を背ける。

「やめろ！ そいつは関係ないだろ！」

「ならば答えろ！ きさまは国王の味方か！ 我々と共に来るか！」

「だから言ってるだろ！ おれはそんなの興味ないんだ！」

テルは腹の底から怒鳴った。

「お前の意思など関係ない。問題は我ら反乱軍に加わるかどうかだ！」

ダンザの剣をつたって、シエラの白い服に鮮血が落ちる。

「シエーラ！」

テルは剣を捨てて膝をついた。そんなテルを見て、ダンザは剣を下ろす。

「我々と来るならばこの娘は解放しよう。庶民の平和を守ることが我々反乱軍の目的だ」

ダンザの言葉に、テルは手のひらを握りしめた。

「頼むから……その子には手を出さないでくれ」

男たちがテルの肩を掴んで立たせる。そして、放り投げられた剣を拾った。

うなだれながら男たちに従って歩くテルに、ダンザが言った。

「それでいい。お前が犠牲として兵士となることで、これから大勢の人々が平和と自由を手にすることができるんだ」

ダンザの言葉に、テルは顔を上げた。その灰色の眼光はまるで、狼のようにギラギラしている。

ダンザはその幼い剣士に気おされたかのように、目を見張った。

「なにが犠牲だ……」

テルは男たちの手を振り払った。

「おれはどこにも所属するつもりはない！ おれを屈服させたけれ

「ばおれを殴れ！」

「何を生意気な！」

男たちがテルを殴りつける。しかし、テルはひれ伏さなかった。

「限られた道の中で強く生きることが自由だ！ 力に屈することは自由を捨てることだ！」

「そうだ……カイルはそんな自分を誰よりもわかってくれていた……だからあの時、ああ言ったんだ。」

他人の信念に同調して、御膳立てされた戦いに命を燃やすなどまっぴらだ。

自分の命は自分のためのもの。他人を救うためなどではない。自分一人の人生のためにあるのだ。

一度きりの人生だ。どこまでも自由に生きる。たとえ間違った道だとしても、決して後悔などしない。

「ダンザさん！ こいつの剣に国王軍の紋章が！」

テルの剣を奪った男が不意に叫んだ。その言葉に、男たちの視線が一斉に柄に刻まれた獅子に向けられる。

それはエレクにもらった剣で、テルは決して国王に忠誠を誓ってなどいない。

剣のもつ意味に縛られず、その刃で戦う——それは、テルの自由な心の表れだった。

「きさま、大口を叩いておきながら……」

テルの側にいた男が、剣を抜いた。シエラは小さく悲鳴をあげる。

「しょせんはきさまも国王の犬か！」

男は今にもテルに斬りかかりそうな雰囲気だった。しかし、傍らの男に腕を掴まれているため、テルは逃げられない。

自分を殺せという喧騒の中、テルは何とか生き残る方法を探す。だが、殴られた痛みで体がうまく動かない。

「国王軍は根絶やしにせねば……」

剣を手にした男が近付いてくる。テルは反射的に腰の剣を抜こうとするが、もちろんその手は空気を握りしめただけだった。

「もうやめておけ」

その時、意外な言葉がダンザから発せられた。テルやシエラだけでなく、その場にいた男たちも皆驚いて彼を見る。

よほど驚いたのか、側にいた男がいきなりテルの腕をはなしたため、彼は硬い岩の上に頭を打ち付けるはめになった。思わず意識が飛びそうになる。

ダンザはシエラをはなした。シエラは一瞬何が何かわからず立ちつくしたが、すぐにテルの側へ駆け寄る。

「テル……」

シエラはテルのぼろぼろの手を掴む。テルは視界がぼやけて彼女の姿は見えなかったが、それでも彼女が震えていることがわかった。「どうしたんですダンザさん」

「こいつはここで息の根を止めなければ！」

男たちがそう言うが、ダンザは二人に背を向けた。

「そいつらはもうほうっておけ……行くぞ！」

ダンザの言葉に、シエラは驚いて彼を見る。兵士たちもうばいの色を隠せないでいたが、もう何も言わずダンザについていった。国王軍の紋章が入った剣は置いていった。ダンザは一度だけテルの方を振り返ったが、とうとう何も言わなかった。

兵士たちの姿が霧の向こうに見えなくなってから、シエラは優しくテルの体を起こした。力が入らないのか、ぐったりしている。

思えば、この少年はいつも痩せっぽちで、傷だらけだ。四年前に、初めて出逢った時から――。

いきなり、シエラはテルを思い切り抱きしめた。驚きと傷の痛み、テルはたまらず叫び声をあげる。

「理由は訊かないわね。あなたの自由に、理由なんていらぬもの」
「……………」

テルは思わず微笑んだ。

自分の心を理解してくれて、少しだけ救われたような気がした。

第四話 干からびたリンゴ

テルはポケットの中から、干からびたリンゴを取り出す。

彼の手のひらにのつたそれはまるで、キリストの降誕祭にモミの木に飾られる、おもちゃのようなくすんだ色のリンゴだった。

テルは何事か考え込むようにそれを見つめたあと、ガツとかじつてみる。——文字通り、歯がたたなかった。

その様子を無言で、無表情に見つめていたシエラが言う。

「ねえテル……一つ訊いてもいい？」

「ああ、霧が晴れたら出発するよ。心配するな」

シエラの方を見ようとせせず、テルは答える。そして、リンゴをどこかに放り投げた。

「そうじゃなくて……」

「……………」

言葉を濁すシエラに、テルは放り投げたリンゴを見る。

「ああ、あれ食べたいのか。やめとけよ。いくらハラ減ってるからって」

「あんなのいらないわよ」

シエラはため息をついた。

「あなたの行動って矛盾してる」

シエラの言葉に、テルは首をかしげる。

「矛盾してる？」

テルは意地悪そうな笑みを浮かべる。

「なんでそう思うんだ」

シエラは、微笑を浮かべるテルを鋭い目で見る。

「さっきあんなにやられても従わなかったくらい自由にこだわるあなたが、どうして私を助けにきたの」

「だからそれは、ベルローズさんと約束したから——」

テルは何度も説明してきた話を、もう一度口にする。

「おかしいじゃない」

眉をひそめてそう言うシエラは、いつもの穏和な彼女とは明らかに違っていた。

「……お前、いきなりどうしたんだ」

その言葉を見無視して、シエラは立ち上がりテルの側へ歩く。

「自由を愛するあなたが、どうしてそんな約束に縛られてるの?」

シエラは挑発するような口調で、テルの顔に自分の顔をぐっと近付けて言う。

「約束? ……そんなのあなたに似合わない」

「……………」

テルはシエラの肩をガツと掴む。その動きは乱暴だったが、表情は落ち着いていた。

「おれを怒らせたいのか」

シエラは何も答えない。テルも、言葉とは裏腹に彼女に対して腹を立てている様子はなかった。

自分の五センチ先にある少女の顔は人形のように美しく、微動だにしない。

自分を試しているのだろうか……。

テルは目を細めて、お嬢様を見つめる。彼女のエメラルド色の目も、自分を見つめていた。

しかし、テルは彼女の肩をはなすと、スッと立ち上がり背を向けた。

「おれの勝手だ」

「そうね……」

シエラは顔を伏せ、独り言のようにつぶやいた。

霧が晴れてから、二人は出発した。

二人はお互い口をきこうともせず、山を登り続ける。

ここ数時間のシエラは様子がおかしかった。

どこかそっけなく、一人で何かを考え込むような顔をしていた。先ほどの態度も、いつもの彼女ならば考えられない。まるで、情緒不安定な子供のようなだ。

テルはもちろんそのことに気付いていたが、あえて何も言わなかった。まるで、その原因がわかっているかのように――。

木々が生い茂っている中をしばらく進んでいると、少し開けた所に出た。見渡せば、そこには湖が広がっている。

木の葉の影になり、太陽の光は差さない。汗だけで歩き続けていた二人には、水気をはらんだ空気は風のように爽快だ。

水面はなめらかで、神秘的な銀色の光を放っていた。案外深さがあるらしく、覗き込むと湖底は鮮やかに青く澄んでいる。

静かだった。辺りには小さな波の音と、鳥の鳴き声しか聞こえない。

フクロウの追手はまだ現れなかった。自分たちの居場所がわからないのか、それとも、追う意味もないということなのだろうか――どちらにせよ、もし自分たちの前に姿を見せる者がいるとするなら、それは間違いなくカイルだろう。

テルは麻のブラウスを脱いで、ゆっくりと湖の中へ進んでいく。湖底の砂の柔らかな感触と、心地よい水の冷たさがたわってくる。同時に、先ほど受けた傷がかなり強くしみた。

「ちくしょーあいつら……思い切り殴る蹴るの暴行を加えやがって……」

うらめしそうにつぶやきながら、テルは体についた血や泥をこすり落とす。そんな彼の姿を少し離れた所から見ながら、シエラは何やら複雑な顔をしていた。

三つ編みをほどき、顔を洗う。赤毛を伸ばした少年は、いつもよりどこか雄壮に見えた。

顔についた泥で水面が一瞬濁るが、すぐに元の通り静かになった。水面に映る自分の姿は兄とよく似ているが、やはりどこか違う。「ねえテル……あなたのお兄さんの……カイルのことなんだけど」

シエラの声が湖に響き渡る。不思議そうに自分を見るテルに、シエラは目をそらした。

「どうして彼が約束を破ってあんなことを言ったのか……思い当たることはないの？」

何故突然そんなことを訊くのだろうか……。

テルはその理由が気になったが、素直に問いに答える。

「ああ……そうだな。思い当たることは、ある」

テルのその言葉に、シエラは再び彼を見た。

何かに苦悩しているように、シエラはテルを見つめる。そんなシエラに、テルは更にけげんそうな顔で彼女を見た。

その時、突然雨が湖に降り始めた。辺りにたちまち水の音が響き渡る。

テルは困ったように空を見上げた。その顔にも、容赦なく水滴がぶつかる。

いつの間にか太陽は姿を消し、空には重苦しい灰色の雲が広がっていた。

会話は中断された。シエラはそのあととも無表情にテルを見つめていたが、とうとう口を開こうとしなかった。

「おお、カイル。お前もテルの奴を追ってるんだな」

リファドの中腹、雨の滴さえ木々にはばまれて届かない中、カイルは立ちつくしていた。そんな彼の前に、同じく裏切り者のテルを追ってきたフクロウの男たちが現れ声をかけてきた。

追っ手は七人。その中には、昨夜ロスワードの敷地に侵入した者の姿もあった。

三十代半ばほどで、皆無精髭のある盗賊らしい人相をしている。身につけている服も粗末で、貴族の若君のように美形のカイルとはとても似つかわしくない。

まだ昼間なのに、厚い雲のおかげで空は暗かった。雨に濡れて足

下は悪く、山に登るのは困難だ。男たちの足は泥で汚れ、汗と雨にまみれず濡れだった。

こんな天気のためか、カイルの周囲はどこか陰うつな雰囲気がち込めている。人を寄せつけず、近寄りがたい。

テルとは違い、鋭い目と鉛玉ような色の虹彩はカイルにはよく似合っている。

人なつつくく誰とでも親しくなれるテルに対し、カイルは人と関わることを避ける傾向があった。

そのため人嫌いと思われていたカイルの、弟に対する態度にはフクロウの皆が驚いたものだった。

男たちはカイルの側に寄ってきて尋ねる。

「どうだ。テルがリファドを通ったような形跡はあるか」

「……………」

「まったくあのガキだけは。前々から何考えてるかわからん奴だったか……………」

「……………」

「ようやく本性を現しやがったってことだな」

「……………」

カイルは何を言われても何も答えず、ただ一点を見つめていた。男たちはいぶかしげな顔をして、そんなカイルを見る。

「おい、どうしたんだカイル」

「ああ、弟のことを心配してんのか」

「ははは、何も俺たちやあいつを殺そうとは思ってねえよ。安心しな」

「あいつは強いし、頭も切れるからな」

「……………」

明るい茶髪の男が、カイルの肩に手をかけて言う。

「おい、お前本当にどうしたんだ」

その言葉に、カイルはやっと瞳を動かして男を見た。彼の目は普段にも増して鋭く、殺気さえはらんでいるようだった。

「お前たち……テルのことは俺に任せて帰れ」

カイルのその言葉に、男たちは驚いて顔を見合わせた。一方で、カイルは一人歩き出す。

「おいカイル。てめえどういっつもりだ」

「お前までフクロウを裏切ろうつてのか」

そう言った男が剣を抜いた。続いて、その場にいた全員がカイルに向かって剣を向けた。

「裏切るも何も……俺たちや初めから仲間なんかじゃなかったろ」

「何だときさま——！」

逆上した黒髪の男が、カイルに向かって剣を振りかぶった。カイルはそれを、素早い抜剣とともに頭の上で受け止める。

「今ここで全員斬り殺したって構わないんだぞ」

カイルは冷たくそう言い放つ。そして、男の剣を弾いた。

「くそう」

男たちは渋い顔をして剣を収めた。——カイルに剣で敵う者などいないのは、誰でもわかっている。

「これで済むと思うなよ……」

「弟もお前も、地獄に送ってやる！」

「せいぜい遠くまで逃げるんだな」

男たちはそう言い残し、山を下っていった。

かつての『仲間』の姿が完全に見えなくなったあと、カイルは再びリファドを登り始めた。

夜になった。

雨は既にあがっていたが、昨日とは違い星も月も出ていない。空には濁った黒い雲が重くのしかかっていた。

空気は肌にまとわりついてわずらわしかったが、時折吹く夜風はそれを一掃してくれる。

二人はリファドを抜け、レーラに入った。リファドを越えた所か

ら更に東に行くと、山頂から流れてくるジェスという川が北から南東へと続いている。

その川の下流に一つの町があり、そこにエドワード・ベルローズの屋敷があるらしい。

さらさらと涼しげな音をたてながら、川は緩やかに流れる。

二人は闇の中を、迷わないように川の音に耳をすませながら進んでいた。もうそうやって、お互い口をつぐんだまま一時間以上川に沿って歩き続けている。

その時突然、テルの後ろでシエラの足音が止まった。テルも立ち止まり、彼女の方を振り返る。

「どうした。もうすぐ町に着くんだろ」

テルはそう言って、にっこりと人なつっこい笑顔を浮かべる。それに対して、シエラは不安げな表情をしていた。

「ねえテル……私を叔父さんの所に連れていったあと……あなたは……どうするの？」

テルは再び歩き出しながら答える。

「さあ……どうしようかな。先のことなんかわからないさ」

テルはそう言いながら、相変わらず能天気そうににこにこしていた。シエラはそんな彼の前に回り込み、その顔を見上げて言う。

「嘘よ……あなたに限って」

「……………」

真剣な表情でシエラに見つめられて、テルの笑顔が消える。それを見た者は、彼の今までの表情がまったくの作り笑いであることに気がつくだろう。

シエラは、心配そうに尋ねる。

「お兄さんに会いに行くんでしょう」

テルはにこっと笑う。その笑顔は、少し意地悪そうにも見えた。

「どうしてそう思うんだ」

シエラはうつむく。そして、悲しそうに言った。

「わかるわよ……あなたの考えることなんか」

「……………」
彼ともう一度別れば、彼はもう自分の元へ戻ってはこないだろう。自由のために生きる彼が、いつまでも古い約束に従うはずがない。

シエラは、二年ぶりに再会したテルが再び手の届かない所へ行ってしまふことを恐れていた。

そんな彼女の気持ちは、テルもよくわかっている。

だからこそ、もう話をはぐらかそうとはしなかった。

テルは急に真面目な顔になって、口を開いた。

「会って……話さなきゃいけないことがあるんだ。きっとカイルも、そのためにおれを追ってる」

「……………」

シエラは、何かに悩むように黙り込んだ。そして、意を決したようにテルの目をまっすぐ見据えて言った。

「私も……あなたに言わなきゃいけないことがあるの」

「それをお前が話す必要はない。お前は俺と来るんだ」

突然後ろから聞こえた声に、テルは驚いて後ろを振り返る。

そこには——兄カイルの姿があった。

いつかは来ると思ったが、まさかこんなに急に現れるとは……。

テルはとっさにシエラをかばう。しかし、彼女はその手を押し戻してカイルと向かい合った。

「いいえ……私には彼に本当のことを話す義務があるの。——あなたにもね」

「……………」

カイルは恐ろしい形相で少女を睨みつけた。しかし、シエラは顔色一つ変えずに、彼を見据える。

「おい、なに言ってるんだよ」

訳がわからずテルが言う。シエラはその言葉を無視して続ける。

「あなたにも改めて話を聞いてくれるよう、お願いします」

「ふざけたことを……」

カイルは剣を抜いた。それとほぼ同時に、テルも抜剣する。

「この子を殺されちゃあ困るな、カイル。おれの主人は今、この子なんだ」

ふざけているような口調だったが、テルの剣は油断なくカイルに向けられていた。

「主人だと……？ 自由に生きるつもりじゃなかったのか」

テルは両手を広げる。

「自由さ！ おれは今だってどこにも所属していないし、これから一人で生きる」

「……………」

テルは両手で剣を構え直した。

「強くなっただよ……自由に生きれる」

「試してみようか。弱虫な弟が」

カイルはにやりと笑った。テルも不敵に笑う。

「あとにしてみらってもいい？」

「……………」

「……………」

シエラの冷たい言葉に、二人とも何も言えなかった。

シエラはテルの方に向き直る。

「あなたのお兄さんが私をあなたから引き離したいと思っているのには、理由があるの」

「おい！」

カイルが声をあげる。しかし、シエラは話し続けた。

「ずっと黙っていてごめんなさい。あのね……………」

「よせ！ 許さないぞ！」

シエラはカイルの方を見る。その彼女の顔を見て、カイルは言葉を失った。

シエラは泣いていた。

「……………」

シエラは手の甲で涙をぬぐい、しっかりとテルの目を見た。

「あのね……私のお父様があなたを引き取ったのは——父があなたたちのお父さんを殺したからなの」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2447/>

B E F R E E

2010年10月10日20時45分発行